

物事の見方を変え、次の行動へと意識を向けることができれば、その経験を挫折ではなく、成長への過程として受け止められる。

語り手 末廣純成（高校五期生 教員） 聞き手 岡本葉南

### 高校時代の印象

―まず、高校時代を振り返って一番印象に残っていることとかありますか。

はい、二つあります。まず一つ目は田辺記子先生との出会いです。母が体育の教員をしていることもあり、私は小学校5年生からずっと教員になりたいという夢がありました。それで教科を何にしようか迷っていた時に田辺先生と出会いました。元々社会科は、好きだったのですが、社会科と数学科で迷っている中で、田辺先生と出会い、社会科の教員になりたいと思いました。もし田辺先生と出会っていなかったら、多分今の自分はいないと思います。

―すごく大きな存在だったんですね。

はい。もう一つはサッカー部顧問の吉田貴彦先生との出会いです。私は葉山中学校のサッカー部出身です。立命館守山高高等学校はグラウンドが新しく人工芝になり、施設的环境も充実しており、ここで練習したいという理由で、立命館守山高高等学校に入学しました。吉田先生との出会いが、物凄く自分の成長過程において大きい影響でした。

### サッカー部時代

―まず、吉田先生との出会いからお伺いしたいですけど、サッカー部に入った理由、きっかけみたいなものはありますか。

私は小学4年生からサッカーをしています。また、中学3年間もサッカーをずっとしていて、サッカーが大好きでした。さらに、先ほども少し述べましたが、人工芝のグラウンドでサッカーをしたいという思いがあり、サッカー部に入部しました。

―それが高校でもサッカー部に入るきっかけになったんですね。

そうですね。小学生から中学生にかけて一緒に仲良くサッカーをする仲間がいたので、サッカーを続けることができました。なので、感謝をしています。

―実際に立守のサッカー部に入ってみてどうでしたか。

はい、中学の時はレギュラーでしたが、立命館守山に入ったら、クラブチーム出身のサッカーが上手い子ばかりで、私はこのままレギュラー取れずに3年間終わるのかなとか思ったり、色々考えたりなどした時期がありました。A、B、C、Dチームくらいまであって、Dチームやっただんです。そこが始まりでした。そして、一年生にとつての三年生は、なんか怖くて。ただ、一年生の中でもレギュラーになっている子がいって、そういうプレーや雰囲気とかを見ると、私はレギュラーになることは、無理なんじゃないかっていうのをいつも思っていたのが正直な気持ちですね。

あと、いつも外周があつて、めっちゃ走るんですけど、私はいつも1・2周遅れだったんです。体力が全然なくて。なので、いつも1人でずっと走って、今後どうしたらよいのかかかって思いながら生活してたっていうのが一年生の頃でしたね。

―部内の雰囲気とかはどうでしたか。

はい、雰囲気的には優しい先輩が多くて、よかったと思います。私たちの代も、目標に向かって一生懸命頑張ろうっていう雰囲気で常に真剣に練習や試合をしていましたね。チームメイトと試合中は互いに言い合い、どうすれば上手くいくのか、勝てるのかを話をしていたのが印象的です。お互いに高め合っていたと思います。

私は守備的MFの選手だったので攻撃の選手が取られたボールを取り返したり、相手の動きを予測してボールをよく奪ったりしていましたね。あと黙々とやるタイプでした。ポジシヨンの、私の性格的には合っていたので、本当に楽しくサッカーができていました。今も高校のサッカー部の仲間に感謝をしています。

―立守のサッカー部ってハードなイメージがあるんですけど。今年全国にも行ったそうですし。でも、雰囲気も良くて素敵ですね。そんな部活の中で大変だった、苦労したこととかはありますか。

そうですね。1年生の時、シュート決めてAに上がりかけたんですけど、その試合で右膝の靭帯を損傷して、全治半年ぐらいの怪我を負ってしまいました。

―え、挫折の経験もされたんですね。きっと悔しかったですね。

はい、その時に、うわあ、自分もうちょっとでAに上がる可能性があったのに……と思うって。正直、その時はモチベーションがぐっと下がりましたね。

でも、なんかこう、色々今まではサッカーに没頭していましたが、負傷してちよっとサッカーを俯瞰して見ることができるようになりました。

例えば、自分には今何が足りてないのかを理解することができ、吉田

先生がこの時にどのようなプレーをしたら評価してくれるのかなどが分かりました。生徒と教員の時はめっちゃめっちゃ怒られていたんです。でも、怪我をして私もマネージャーみたいな立場になったので、吉田先生の近くで一緒にサッカーを見せてもらって、それが物凄く、この後のサッカーにいい影響を与えてくれました。

―選手としてもマネージャーとしても、どちらの立場も経験されていたんですね。他にも努力されたことはありますか。

怪我をした時に、「今自分に何ができるか」と考えたら、筋力を向上させて、誰にも負けない体を作ろうと思ったんです。それで上半身の筋トレをめっちゃやって。下半身は怪我明けからやり出して、誰にもバトルで負けない体作りをしました。

その結果、吉田先生にもちよっと認めてもらいました。そして、怪我から復帰して最初の遠征での試合で今まで以上に動けて、相手のボールをたくさん奪うことができました。それを多分見てくださって、それから、2年生の終わりから3年生にかけて1年間ずっとレギュラーで出させてもらいました。

―じゃあ、怪我して、悔しかったと思うんですけど、その半年間はあってよかったなと思いますか。

その怪我の期間がなかったら今の私はないと言っても過言ではありません。ほんと良かったと思います。なんかね、大きい挫折と言われたら挫折かもしれないです。でも、怪我をした後、「物事の見方を変え、次の行動へと意識を向けることができれば、その経験を挫折ではなく、成長への過程として受け止められる」と思っています。だからこそ、怪我をしていた期間は自分自身が大きく成長できた、人生における貴重な時間でした。

―悔しさがバネになったんですね。吉田先生のマネージャーとしてついていた時が多いと思うんですけど、今教員をされていて、指導する中で先生からの言葉で今も大事にされているものがあれば。

結局、同じ目標に向かって、チームが一つになって、生徒と同じようにこつちも心を燃やして。そういう部分は、私も似ているなと思います。私は基本的に怒らないんですけど。(笑)吉田先生のいつも一生懸命なメリハリのある本気の教え方とかが、なんか知らん間にこれがいいなあって思っていました。それはなぜかというと、高校の時だけやったら覚えてなかったと思うんです。

しかし私は、大学院の時に、院生講師として立命館守山中学・高等学校で働いていたと同時に2年間サッカー部のコーチをさせていただいていたんです。その時に吉田先生の近くで一緒に教師として、人との関わり方やコーチングなどを見せてもらい、それが今の私のサッカーの指導に活きているなと思っています。そのため、吉田先生から生徒の心を掴んで、チームを一つにまとめる力を学んだことで、指導への自信が大きくなりました。

将来の夢のきつかけ

―続いて、田辺先生との出会いについて伺いたいのですが、どんな関係性だったんですか。

はい、高校2年生の担任の先生でしたね。

―担任として出会って、社会科の魅力に気づいた感じですか。

はい、社会科は好きな教科でした。しかし、正直今まで受けてきた社会科の授業が面白かったかと言ったら、そうじゃなくて。そんな時に田辺先生と出会いました。日本史の授業受けていたんですけど、流れが

ね、すごいんです。普通であれば、プリント学習は穴埋め問題とかを取り入れる先生が多いんですけど、そうではなくて、全部一連の流れを繋げて授業をされていました。授業中にメモしたことを全部繋げられると、自分の言葉で授業の流れを説明できるようになるんです。

―えー、すごい。

田辺先生の作る問題は難しいので、常に良い点は取れることはできなかったですが、1回80点ぐらい取ったかな。

―いや、めちゃくちゃいいじゃないですか(笑)。

いや、他の教科は低かったです(笑)。

話を戻すと、授業の流れが非常に面白くて、もう、気づいたら授業に食らいついていたことを覚えています。これが社会科の授業なんやなっていうのがわかりました。

―田辺先生から学んだ社会科の面白さが、進路にも大きく影響したんですね。

はい。私は文学部の人間研究学域か日本史研究学域かで悩んでいて、「どちらでも面白いかもしれないけど、社会科の教員になるんやったら得意な専攻をしっかりと持ったときなさい」って言われました。地理なのか、歴史なのか、公民なのか。そうなった時に、私は田辺先生の教えていた日本史が好きだったので、「日本史研究学域にいきます」と伝え、勉強して入学しました。結局、田辺先生も日本史研究学域だったので、私は後輩になるんですけど。

―日本史学では具体的にどんなことを学んだのですか。

古代史から近現代史までを担当するそれぞれの教授の授業を受けて歴史学を幅広く学びました。具体的には、過去に起きた人間社会の出来事を、証拠に基づいて研究し、その意味や背景、因果関係を明らかにしよ

うと研究しました。

私は『スポーツ報道の読者―暗い1930年の世相の中に存在するスポーツという光―』というテーマで研究しました。具体的には、『東京朝日新聞』や『都新聞』を取り上げ、1930年という暗い世相にスポーツ報道が人々に元氣や希望を与える存在となり、その後のスポーツの発展へと繋がったのではないかと主張する論文を書きました。

立命館大学の図書館や大阪の中之島図書館などで一日中様々な史料を読み、1年間の新聞を読んだり、当時の人々の言葉を拾い上げたりするなどをしました。せつかくなら良い卒業論文を書きたいと非常に厳しいゼミに入りました。しかし、最後の口頭試問では数多く質問され、単位がもらえるか心配だったことを覚えています。今となってはいい思い出です。(笑)

―将来の夢に向かうためには、やはり田辺先生の実在は大きかったですか。

本当に大きかったです。社会科の教員になりたいと言った時の田辺先生の「得意な分野をしっかり持ちなさい」という一言で私はすぐスムーズに決められました。

―では、現在のご職業について伺いたいのですが、末廣さんは中学校で教師をされていますが、生徒とはどんなふうに関わることを意識しているんですか。

私が生徒と関わるうえで、意識していることは、2つあります。

1つ目は毎日必ず学級の全生徒と一度は言葉を交わすことです。日々の対話は生徒の表情や感情の変化を把握するための有効な手段です。また、継続的に関わることで微細な心的変化にも気付くことができます。そのため、生徒の変化を見逃さないように常に注意深く観察する姿勢を

意識しています。

2つ目は、生徒たちが「毎日この学級に行きたい」と感じることができる環境を創りあげ、主体的に笑顔あふれる学級を形成できるように支援することです。

現在、私は中学1年生の担任をしており、価値観や性格の異なる個性豊かな生徒が数多く在籍しています。そのため、意見の衝突が発生する場面は少なくありません。そこで私自身が介入して直ちに問題を収束させるのではなく、生徒同士が自らの意見を述べ合い、相互理解に至るまで対話を継続できるよう促すことを意識しています。この過程を重ねることで、生徒の主体性と協働性が育成されると考えています。

―それは、田辺先生とか吉田先生から影響を受けている部分はあったんですか。

学級経営については自己流の実践を展開しています。全国各地の教員の実践に話を伺ったり、書籍から学んだりする中で、感銘を受けた実践や考え方を積極的に取り入れるようにしています。一方、授業面においては田辺先生の影響を強く受け、学習内の「つながり」を意識した授業づくりをしています。また、人の心を掴むことや、人としての在り方については吉田先生から多く学びを得てきました。この2人の先生との出会いは現在の私の教育観と実践に決定的な影響を与えています。さらに、職場や様々な場所で尊敬する数多くの先生方と出会い、それらの先生方の優れた指導方法を積極的に取り入れ、自分の指導スタイルとして発展させています。

―じゃあ、高校時代の経験が今のこう、教師っていうお仕事とか生活にどう活かされていますか。

高校時代の経験を通して、目標に向けた継続的な努力は成果に結びつ

く可能性を高めるといふ認識を得ることができました。また、目に見える成果が現れていない段階であっても、それは努力が無駄であることを意味するのではなく、プロセスの途上であるという視点を持つようになりました。

具体的には、学級経営や授業、生徒指導などにおいて思うような成果が得ることができない場面では、多様な課題や葛藤が生じます。しかし、教育実践における成果は短期間では得られないことが多く、解決には継続的な取組が求められます。そのため、結果が即時に表れない状況を否定的に捉えるのではなく、努力の過程にあると認識し、着実に取り組む続ける姿勢を維持しています。このような認知的枠組みが形成された背景には、高校時代の経験が影響しています。今後も日々の実践を積み重ね、長期的な目標に向かって継続的に学び続けることで、自己成長につなげていきたいと思っています。

立命館守山高等学校に入学し、尊敬できる田辺先生と吉田先生に出会えたこと、そしてサッカー部で仲間とともに切磋琢磨し、多くの学びと成長の機会に恵まれたことを、心から嬉しく思っています。

今後も立命館守山高等学校の卒業生であることを誇りに、教育現場で生徒たちと真摯に向き合いながら力を尽くしていきたいです。

―なるほど。長い間お話を聞かせていただいてありがとうございます。――

#### 【感想】

末廣さんが、部活動の大事な時期に怪我をされたことに対して「物事の見方を変え、次の行動へと意識を向けることができれば、その経験を挫折ではなく、成長への過程として受け止められる」というお言葉が心

に残りました。私はまだ大きな挫折を経験したことはありませんが、末廣さんの考え方を知って「挫折」を言い訳に立ち止まるのではなく、そこから何を学び、どう成長できるかを考えることの大切さに気づきました。今後、思うようにいかないことがあっても、その出来事は自分を強くするきっかけに変えられるような人でありたいと思います。



右：聞き手 岡本葉南

左：語り手 末廣純成さん